

革靴の音に冷や汗が垂れる。

美しい立ち姿でずらりと整列したバニーガールたち。その端で一人、目線を下げ、縮こまって立っている。

それが、今のわたしだ。

「ご指名はありますでしょうか」

支配人の落ち着いた声が響く。

緊張で床しか見ることができない。コツコツという足音だけが聞こえる。しばらくは迷うように響いていたそれが、ふと早足になり――

――あろうことか、わたしの目の前で止まってしまった。

縫い目の美しいこの靴は、フェラガモだろうか。傷ひとつないそれから恐る恐る視線を上げる。

わずかに口端を吊り上げてこちらを見るその人物こそが――わたしが昼間勤めている会社の会長息子、その人だった。



会社に秘密でパニーガール
ラウンジで働いたら

会長息子の 御曹司

が来ちゃった上
なぜか気に入られ

娶られエッチ

が始まった話

ろくもいふさき

絢辻 透

「支配人さん、わ、わたし……どどどど、どうすれば……っ」

「困ったな……一応私からも初日で何も知らないから別のキャストをと勧めたのだが、尚更丁度いいと仰ってね。うちとしてはVIPの指名を断るわけにはいかないんだ」

「でもわたし、本当に、なにも接客とか、できなくて……!」

「……まあ、そういう初心な女性が好きなのかもしれない。自分なりに粗相のないように話すんだ。こういう場は慣れているはずだし、お優しい方だから大丈夫だろう」

待機室でうろたえるわたしに、困った様子ながら優しい笑顔で支配人が言う。

着慣れないぴっちりとしたバニーガール衣装で、室温は少し寒いくらいなのに冷や汗が吹き出す。

……断ってくれるかと思っていたのだが、そういうわけではないらしい。
本格的にまずい状況になってしまった。

（会社、クビになるかも………）

絶望に打ちひしがれる。

もちろん、平社員であるわたしは会長息子などには縁がない。ただ彼は時折会長と共に営業先の挨拶周りをすることがあり、その中でたった一度だけ顔を合わせ……話したことがあるのだ。

もうずいぶん前だから覚えていないとは思うけれど、もし覚えられていたら、会社に報告されてしまうかもしれない。

そもそも覚えられていなくとも、水商売なんてやったことがないからまともに接客できる気もしない。

「……初出勤でVIPルームに就くのはさぞかし緊張すると思うけれど、フォローの黒服は部屋前に待機させておくから。大丈夫、笑顔が一番の接客だからね」

優しい支配人の言葉が痛い。

奨学金の支払いで追われる日々に終止符を打ちたくて、友達に勧められて潜り込んだ高級ラウンジ。

初日でもものすごく緊張していたのに、バニーガール衣装だなんて知らなくて、その上VIPが来るからとにかく着て端に並んでおいてくれと言われて。

露出の高い衣装に恥ずかしさが募りつつ、訳も分らず並んだら、こんなことになってしまった。

「……わかりました。やれるだけ、やってみます」

うなだれながらも頷いた。こうなったら玉碎覚悟でやるしかない。
背筋を正し笑顔を作る。

「ああ、いいね、大丈夫そうだ。ただ一つだけ——うちはZのは控えめになっているから……
出来るだけ、彼の言うことに従うんだよ」

どういう意味か分からなくて首を傾げる。

お優しい方だから大丈夫、と、支配人は目元を緩ませて笑った。

「し……失礼、します……!」

緊張で震えが止まらない。履き慣れない高いヒールのパンプスで、せめて変な歩き方にならないように気をつけながら、革張りのソファに座る彼の元へとゆっくりと歩み寄る。

年は、たしかわたしの少し上だ。

すらりと整った鼻筋に精悍な眉毛、少し青みがかった瞳が美しい。視察に来る度そこかしこで黄色い悲鳴が上がる、引く手あまたの御曹司。

——ちょっとしたおふざけも込めて、会社の皆は影でこっそり彼を様付けで呼ぶ。

それがこの人、鷹宮 晴臣（たかみや はるおみ）さんだ。

「ああ、初めてだったな。そんなに緊張しなくていい、隣においで」

「は、はい、失礼します……!」

笑顔でぽん、と示された隣に腰が引けつつも座る。何を言われるのか、いやこういう場合はわたしから話しかけるべきでは……? とぐるぐる考えながら恐る恐る視線を合わせると、堪えきれないと言ったように笑われてしまった。

「ふ……つくく、そんなに怯えないでくれ、取って食いやしない。初めてなのは聞いているから、まずは普通に話してくればいいんだ」

「ご、ごめんなさい……ありがとうございます……! そ……っその、し、指名を、どうして、わたしに」

「ああ……いや、実は俺、こういう場は好きじゃないんだ。得意先の社長が懇意にしているキャストがいるらしくて、付き合いで来てな。君はどうも慣れていなさそうで安心出来そうだったのと——それに……君がとても、可愛かったから」

お世辞だとはわかっていても、優しく囁きかけられるとドキっとしてしまう。
ただ、それ以上に安心した。

(……覚えられてるわけじゃ、なさそう)

報告される心配が少し薄れた。

会社ではスーツで髪も結んでいるし、今のこの格好ではたとえ顔をちょっと見たことがあっても気付かれないかもしれない。ほんの少し緊張を解いて、改めて彼の方に向き直る。嬉しそうにニコ、と微笑んでくれた。

「そんな……でも、わたしでも役に立てそうなら、よかったです」

「ああ。少し緊張が取れたようで良かった、……名前を聞いても？」

グラスを傾けながらこちらを覗き込まれた。

濡羽色の髪がわずかに揺れている。掘りの深い目元が瞬きの度に光を反射する。笑っていないくともほんの少し上がった口角で、見る者すべてを惹きつける。

今まで意識したことはなかったが、こう間近に迫られると、どうしたって整った顔に見惚れてしまう。

「なっ、名前……そうですよ、えっと……まどか、と申します。よろしくお願いします」
「まどかさん、ね。よろしく。俺のことは……そうだなあ、好きに呼んで貰って構わないが」
「わたしが……あ、あだ名を……っ？」

「ははっ、初めてじゃハードル高いか。隠すことでもないしな、晴臣っていうんだ」

「はい、では……晴臣さん、でいいでしょうか」

「ああ」

何も用意できておらず普通に本名を名乗ってしまった。

まあ、話したことがあるだけで名前は知られていないはずだ。彼も本名を名乗っているようだし、いいか……と思いつつながら、伺うように視線を合わせるとふっと微笑まれて思わず頬が熱くなる。なぜかじつと見つめられ、少し会話の間ができてしまっていて気まずい。

これはもう、正直に言ってしまった方が……楽かもしれない。

「あの、晴臣さん。わたし本当に、さっき初めて出勤したばかりで……何を話していいのかも、わからなくて。粗相があったら申し訳ないのですが、その時は、教えていただけませ

んか」

「ふ、十分丁寧に粗相なんて一つもないじゃないか。それにしても、さっきとは……何か手ほどこや、教えられたことはないのか？」

「まだ、なにも……ただ、その」

「ただ？」

「晴臣さんの、言うことには、従うように——と」

先程言われた言葉を訳も分からず反芻すると、晴臣さんか目を見開いた。

お酒でも飲まされてしまうんだろうか……とうつぶくと、少し屈んで顔を覗き込まれる。

「俺の、言うことに？」

「はい……あ、ただわたし、お酒はあまり強くなくて……飲めはするんですが」

「ははっ、飲ませはしないから安心してくれ。それにしても……従うように、ねえ。なかなかすごいことを言われたものだな」

ソファーに深く沈み込み、グラスを傾けている晴臣さんを見て、困らせてしまっただろ

うかと思う。なにか言われるのかと思ったのだがそういう訳ではないのだろうか——そう思った、瞬間だった。

突然、照明が落ちた。

「きゃ……っ!？」

「……おっと、早いな」

一瞬驚いたけれど、停電などではないようだ。

小さな間接照明はついたままで、店内のBGMが賑やかで大きいものへと変わったただけだった。

声が聞こえにくい。思わず晴臣さんに身体を近付けた。

「あの、これって……?」

「……本当に、知らないんだな。ここはVIPルームだが、普通ならあちこちに席がたくさんあるだろう? 隣の席に見えにくいように、部屋が暗くなる時がある。その時間は、こうして——」

「へ……………」

ふわりと、身体が浮いた。

一瞬、何が起ったのかわからなかった。あまりに安定して腰を抱かれて抵抗する間もなく、晴臣さんの膝の上に、とす、と座らされる。

「っえ、あ、え……っ!？」

「よりキャストと親密になってもいい時間——ということだ」

いたずらに甘く囁かれて全身がカッと熱くなる。

こんな格好で——男の人の、膝の、うえに。

状況を理解すればするほど恥ずかしくて熱くなる。降りたい。降りたいけれど、降りたら従わなかったということになってしまふのでは……？

真っ赤になってうろたえるわたしの頬をすり、と撫でられて肩がびくりと震えた。

「恥ずかしいか？ これは通常のサービスなはずだが」

「え、え……っ！？ わ、わたし……お話やお酒を飲むだけだと、思つて」

「それは……なるほど……驚いただろうな。嫌だったらすまないが——」

「あ、いえっ、その、ただ恥ずかしくて……っひゃ、！？」

嫌か嫌じゃないかという問題じゃない。想像もしていなかった展開にただただ恥ずかしさが募る。

それなのに撫でる手は止めて貰えない。頬から耳元を擦るように撫でられて、鼻先が触れ合うほどに顔が近付く。

「——そんなに可愛い反応をされると、もっと触れたくなる」

先程よりもトーンを落とした声が間近で響いて、ひ、と喉奥で悲鳴が出る。

どうしよう、どうすれば。混乱している間にも綺麗なアーモンド形の目が熱っぽくこちらを見つめてきて、あまりに綺麗で目を逸らせないでいると——ふ、と優しく微笑まれた。

「嫌でないなら、少し練習してみようか。ほら、こちらに腕を回してみるんだ」

「は、はい……っ」

言われるがまま、カフスのついた両腕を肩に乗せると、もっと回してごらんと低い声が響く。恥ずかしさで震えたまま、広い背中まで腕を回すと、ぴったりとお互いの身体がくっついてしまった。

「は、晴臣さん……っ、これ、恥ずかしすぎるんですが……！」

「本当に可愛らしいな、君を指名して良かった。……俺の言うことには従うように……と、そう言われたんだっただな？」

「？ は、はい……そうですか……っひゃ、」

ちゅ、と首筋に柔らかく唇を押し付けられた。汗が滲んでいる気がして焦って、回して腕に力が入ってしまう。

身じろいだ晴臣さんの唇が耳のすぐ近くで囁く。

「痛いことはしない。どうしても嫌なら振り解いてくれていい。でも、もし嫌でなければ

——俺に身を任せて、力を抜いてくれないか」

「へ、……あ……っ、……は、はい……っ」

こんな、ほとんど初めて会うような人と肌を触れ合わせるなんて、怖いし恥ずかしいはず——なのに。

言い聞かせるような言葉に、どうしてか腰を抱く腕を振りほどけない。

震えながらも頷いて、恐る恐る力を抜くと、いい子だ、と囁かれて梳くように髪を撫でられた。

「この店はな、通常のキャバクラやラウンジよりもバニーガールたちと親密^{ニギヒク}になれることで、業界で人気なんだ。例えば、こうやって——」

「ひゃ、……っあ、く、擦った……!!」

「——キャストの同意があれば、身体のどこに触れても構わないんだよ」

耳元、首筋から鎖骨、そして胸元。

やさしく背中を撫でながら、あちこちに柔らかく唇を押し付けられてぞくぞくと背筋が

震える。わたしの反応を確かめるように時折視線を合わせながら唇を押し付けられて、心臓が早鐘を打つ。

「ど、どこにでも……ですか……っ？」

「そうだ、まあ……口や手でなら、な。それにしても、少し触れたくらいでこんなに真っ赤になって震えて、……人気が出そうで、妬けるな」

もっと触りたいって言うみたいには、網タイツの食い込む太ももをゆるゆると撫でられる。思わず、ぎゅ……っと内股で晴臣さんの足を挟み込んでしまった。

「でも……わたし、こんなのだって、知らなかったから……続けられるか、……っんう……！」
「へえ？　でも、何か働く理由があるんじゃないのか？　ここは他のところよりも貰える額も大きいだろう」

「奨学金を、返したくて……」

「なるほど、それは大変だろうな……、……？」

確かに出来るだけ早く返したくて、高時給のこのラウンジから面接を受けたのだが、それにしてもこんなにえっちなサービスのお店だったなんて。

そう思っていると、返事をしている晴臣さんがふと意識を逸らした気配がした。

少し驚いたようにわたしの胸元を見つめていて、恥ずかしさがこみ上げる。

「君は……こういう服を着るのも、初めてなのか？」

「はい、あの……おかしいでしょうか……っひゃ、……っ」

する……♡ と、黒いラバーのバニースーツで包まれた胸の横を撫でられて変な声が出てしまう。

なにか確認するように、すり……すり……♡ と膨らみを辿られて、悪戯をするようにスーツと胸の隙間をなぞられる。

どうしよう、恥ずかしい、嫌だって言わなきゃ——でも。

「いや。よく似合っているが……もう少し気を付けた方がいい。いくらどこに触れてもいいといっても、ヌーブラカニップレスくらいはつけないと、……こうやって」

「え……あっ……!?!」

「簡単にめくられて、綺麗な胸に……悪戯されてしまう」

頼りなく胸を支えていたラバーの布地が、ペロ……♡ とめくられてしまう。

隠したいのに、回した腕を外せない。ぷるん♡ と飛び出した何もつけていないおっぱいを、熱っぽく見つめられてしまった。

「……っ♡ あ……だ、だめ、はるおみ、さん……っ」

「……すまない、どうしても嫌なら振り解いてくれないか。君があまりにも可愛くて、俺からは……止められそうにない」

「そ、そんな……あっ、♡ ま、って、あ、ん……っ♡」

——ちゅ……♡ ちゅう♡

胸の膨らみに柔らかくキスをされる。そのまま軽く吸われてずくと腰に熱がたまった。直接的な刺激ではないはずなのに、恥ずかしいのに、鼻にかかった甘えた声が出てしまう。

（どうしよ、わたし……こんな状況なのに、興奮、しちゃってる……っ？ あちこち優しくキスされると、ドキドキして……嫌なのに、恥ずかしいのに……振り解けない……っ）

顔も、肩も、胸も熱い。唇で触れたところが敏感になっている気がする。

振り解かなきゃ、そう思うのに手が動かなくて、縋るようにぎゅう……っ、スーツを握った瞬間だった。

——れろ……♡

「あっ、あ……だ、めえ……っ♡」

ちゅ♡ れろ♡

れろれろれろ……♡

可愛がるみたいにゆったりと舌先が乳首へと触れた。様子を伺っていたその舌は、わたしがただ身を振るだけなのを確認すると激しさを増した。

「ひ、ん……っ♡ だめ、はるおみ、さ……っそこ、なめるの、だめえ……♡」

「……ん……、駄目なら振り解かないと。ほら、こっちも触られてしまうぞ」

「っあ!?!♡ あ、かりかり、だめ、ううう……っ♡」

かりかり♡

すりすり♡ ちゅうう……♡

片方のおっぱいを爪先で柔らかく引っかかれて、もう片手は柔らかく吸われて、膝の上で見悶える。じわじわと胸の中心に熱が集まって、固くなってきてしまつて恥ずかしい。

身体が言うことを聞かなくて、誘うみたいに腰が揺れて、晴臣さんの太ももに内ももがこすれていく。

「初めてなのにいやらしく腰を揺らして……その気にするのが上手いな、君は」

「そ、んなの、じゃ、ないです……ほんとに、っあ♡ ん、うう……っ♡」

すりすり♡ こすこす♡

カリカリカリカリ……♡

弱弱しく首を振って否定しているのに、どこかなじるように両方を指先で捏ねられて甘

い吐息が出てしまう。

(胸だけで……こんな興奮すること、なかったのに……♡
膝に跨って、こんな恰好でおっぱい丸出しにさせられて♡
初めてちゃんと話す男の人の
からかうみたいに乳首捏ねられて……腰うずうずするの、とまんない……っ♡)

「少し触ったくらいで健気に勃たせて、もっと触って欲しそうに震えて……本当に、可愛い。感じやすいんだな、まどかさんは」

「ちが……っうう♡ こんな、知らな……っんう♡ あ♡ かりかり、も、だめ、です……っ♡」

「ふ……さっきも言っただろう？ ダメなら振り払っていいんだ、ほら、腕に力を込めて」
「う……力、入らな……くて、くっあっ♡ んうう……っ♡」

ぴん♡ ぴんっ♡

くりくり♡ こねこねこね♡

振り払っていいって言う癖に、勃ってしまった乳首を捏ねる手はより激しさを増す。

恥ずかしい声が出てしまうのを堪えたくて唇を噛むのに、その分とばかりにへこ♡へこ♡と情けなく腰が揺れてしまっただけ意味がない。

「……少しは嫌がる練習もした方がいいな。でないと、本当にだめなことをされてしまう」
「ほ、本当に、だめなこと……？」

「そうだ。ここまでは同意があれば可能だが、例えば……」

先ほどよりも熱っぽく、ずっと興奮した目線で射抜かれてぞく、と背筋が粟立つ。
乳首を捏ねていた指先が胸元からお腹を伝って、もっと下へと辿っていく。
内股が震えてしまうのが、恐怖か期待かわからない。

「ひ……い……っ♡」

「……君が物欲しげに腰をくねらせて誘っていることは、お触り禁止、だ。本来はな」

すりすり♡

すりすりすり……♡

ラバー越しでもわかるくらい熱くなっているそこを、割れ目にそってなぞられて喉が引きつる。

だめ、嫌がらなきゃ——そう思うのに、先程からずっとじくじくと疼いていた下半身が、触られるのを嬉しがる。もっともっと♡　って言うみたいにくらや腰が揺らめいてしまう。

「あつ、うう……♡　だ……っだめ、だめです、そこ、触っちゃだめ……♡」

「ダメならどうするんだ？　ほら、回している腕を解かないと」

ゆるゆると割れ目をなぞる手はそのままに、優しく促されて回した腕を解く。肩を押して、振りほどかなきゃ——そう思った瞬間だった。

カリ……っ♡

カリカリカリ♡

「あっ？♡　あ、んん……っ♡　だめ、それ、——……うう、きもち、い、から……っ♡」

「……ッ、駄目だろう。そんな潤んだ目で真っ赤な顔で、そんなことを言われて止められる男はいないぞ。それとも、誘っているのか……?」

おまんこの、一番弱いところ……クリトリスを甘く引っ搔かれて身悶える。

ぐっと眉根を寄せた晴臣さんがもう片手でおっぱいをむにゅ♡と柔らかく揉んだ。振り解こうとした腕は、縋るものを探して晴臣さんの肩を掴むだけになってしまっている。

すり♡ すり♡

カリカリカリカリ♡

「うあ、あ♡ りようほう、……っだめえ、んんっ♡ あっうそ、なに……っ」

「ん……ぢゅ……っ、キャストの肌に痕を残すこと——これもZのだ。といっても、もう今日は逃がさない。退勤まで俺の席にいてもらうぞ」

首元に吸い付かれて、熱っぽく囁かれて頷くしかなくなってしまふ。というかこんな状態で、もう他の席に出られる気がしない。

もっと触れて欲しい——心の奥でそう思っていることを見透かされたように、衣擦れの音が響く。

「……っあ、あっ!？　だめっ、はる、おみさ……っあ、んああ……っ♡」

「それと……もちろん、こうしてバニースーツをずらして、下着の上から君の膨らんだクリトリスを撫でることもNG、だ」

カリカリ♡

ちゆく♡　ぬりゆぬりゆぬりゆ♡

乳首を吸われながら、スーツをずらされてしまう。網目の広いタイツはいとも簡単にすり抜けられ、パンツの上からおまんこの筋を何度も辿られた。

すっかり溢れてしまった愛液がパンツに滲んで濡れた音が響く。びく……♡　と勃起して震えるクリトリスに塗り付けられるみたいに前後されてお腹がひくひく♡　震える。

「……あ、あっ、ううっ♡　だめ、これ、っんん♡　きもち、よすぎてえ……♡」

「快感に弱すぎるみたいだな、君は。気持ち良いのに耐える練習もするか？　といってもも

う、こんなにとろとろにさせているから……遅いかもしれないが」

甘く囁きながら、かくかくと犬のように腰を揺らすわたしに合わせて、何度もすりすり♡ こりゆこりゆ♡ されて頭がはじける。

（きもちいい♡ きもちいい♡ どうしよ、わたし♡ こんな、男の人の膝の上で♡ お……おまんこ、いじられて、腰振っちゃってる……♡ こんな、絶対だめなのに、ぬるぬるの布越しにクリ甘やかされるの、むり、ゝゝっあ、あっ♡ だめ、ゆび……パンツの、なか、入って……♡）

すりゆ♡

きゅっ♡ しこしこ♡ ちゅこちゅこちゅこ♡

ぬるついてぐちよぐちよのパンツをずらして、ぴんっ♡ と勃起したクリトリスを捕まえられる♡

そのまま、おちんぼにするみたいにしこしこ♡ と擦られて、快感にびくびくと浅ましく身体が揺れる。

「あゝっ♡ それ……しごく、の、むり……っはる、おみ、さ……て、とめ、てえっ♡」
「そんなに目を潤ませて、期待でいっぱいの発情しきった顔をしているの？ それにほら、俺が手を動かさなくなつて……まどかさんが腰を揺らしているから、勝手にしごかれてしまうぞ」

しこしこ♡ しこしこ♡

ぬちゅ♡ ぬりゅぬりゅぬりゅ……♡

晴臣さんの手があまり動かなくなつた分、やだやだ♡ ってするみたいに腰が揺らめいてしまう。その度にクリトリスがちゅこちゅこしごかれて気持ちいい。

どんどん、何も考えられなくなっていく。

「は、うう……っ♡ も、むり、はるおみさあん♡ わたし、も、できな……このお仕事、できない、です……っんあ、あゝっ……♡」

「確かに、客の指で尻尾を振りながらオナニーを初めてしまうまどかさんには、難しいかもしれない。それに本当は、……ほら、こっちを向いて」

ちゅこちゅこ♡ と扱かれて内ももの痙攣が止まらない。言われるがままに顔を向けると、興奮しきって目元に熱を灯した晴臣さんと目が合う。

鼻先同士がすり、と擦れて――あ、逃げられない、と思った瞬間だった。

ちゅ……っ♡

熱くて柔らかいものが、わたしの唇に押し付けられた。

「んう、う……ふ、うう……っ……♡」

「ん……こうして、指名客にはキスをして喜ばせるんだが……それも、君には難しそうだな……？」

ちゅ♡ ちゅう♡

しこしこしこしこ♡ すりゆすりゆすりゆすりゆ♡

少し開いていた唇に舌先を差し入れられ、やわやわと舌同士を擦られながら、クリトリスも一緒に扱かれ続ける。

だんだんと酸欠になっていく頭が多幸福感でいっぱいになって、おまんこがひく♡ ひく♡ と収縮する。

(だめ、キス、きもちいい♡ 舌こすり合わせると頭ふわふわして訳わかんなくなってるのに♡ クリちゅこちゅこしごくの、やめてもらえなくて♡ あ、あ♡ くる、だめ♡ いく、いっちゃう、もういっちゃう……っ♡♡)

「ふ……っあ、ん♡ んんっ♡ はる、おみひや……っんむ、らめ、わたひ……っづう、くくくっっっ♡」

びく、びくびく……っ♡

キスされたまま濁った声が出てしまう。わたしは腰を何度もびくつかせて、とろお……♡ と愛液を溢しながら、イってしまった♡

「……キスしながらイったのか？ すごいな、こんなにびくびくと身体を震わせて……本当に、可愛すぎるな、君は」

「ふぁ……？　——……あつ、あ、は、晴臣さん……ごめんなさい、服、よごれちゃ……っ」

ふわふわと余韻に浸ってぼーっとしていると、遠くから晴臣さんの声が聞こえてきてはつとする。

わたしの愛液でブランドもののスーツを汚してしまわないかが気になって、慌てて肩を押して退こうとした。

それなのに。

「気にしなくていい、……まだ君に触れていたい」

力強く腰を抱き寄せられて口説かれるみたいに囁かれて、また火が灯りそうになる。

その瞬間だった。

コンコン、と壁を叩く音がした。

「あ、あ、はい……っ！」

慌てて服を直して驚いている晴臣さんの膝から降りる。ふらふらのまま出ると、ボーイが立っていた。

——どうやらお連れ様に急用が入ったらしい。

言われたまま伝えると、晴臣さんは苦い顔をしながら、わたしが乱してしまった服を整えて立ち上がった。

「……はあ、全く……今日は随分と振り回されるな。君に会えたから良しとするが……すまない、まどかさん。行かないと」

「あ、いえ、とんでもないです……その、お、お見苦しいところを、見せてしまつて……っ」
「……いや、とても可愛かったよ」

身支度を整える晴臣さんに頭を下げて向き直ると、また熱っぽい視線を向けられて心臓が跳ねる。

「まどかさん。ボトルを入れておくから、今日はもうこれで上がってくれないか。次の出勤

日が決まったらその日に開けさせて欲しい。連絡は、……ここに」

連絡先の書かれたメモを渡される。どうしよう、と思いながらも、これ以上誰かの膝の上に乗れる気もない。

頷いてぎゅっとメモを握ると、名残惜しげに頬を撫でられた。

「……次はもっとゆっくりと、君のとりけた顔が見たい」

囁くような言葉に、先程までの思い出してずくん、と腰が疼く。きゅっと唇を噛みながら頷くと、優しく笑って、触れるだけのキスをされた。

（……どうしよう。指名してもらえるのは、正直、すごく嬉しい。けど、それは晴臣さんだからで、こんなこと他の人相手にできる気がしないし……それに、晴臣さん相手だとしても、もしボロが出て会社に見つかっちゃったら……）

ぐるぐると思い悩みながら晴臣さんを見送った後。

返済金額の半分以上が賄えるほどの金額のシャンパンを入れられていたことを知らされ、あまりの非現実さにふらつきながら分厚い封筒を抱えて帰ったのだが――

――次の出勤日の相談をするために送ったメッセージに、支配人から来た返事は「申し訳ないが、君を雇うことは出来なくなった」という内容だった。